2018年6月1日　アクセス　（1976年11月10日第三種郵便物認可）　第497号

地方小出版 情報誌 アクセス

毎月1回　1日発行
購読料　定価150円
（本体139円）
年間1,500円（税込み）
振替　00120-0-19017

発行所　㈱地方・小出版流通センター　〒162-0836　東京都新宿区南町20
編集　アクセス編集委員会　TEL.03-3260-0355　FAX.03-3235-6182

市井の人に寄り添う情報を

子どもの文化研究所は、一般財団法人文民教育協会として今年創立50周年を迎える

片岡輝　詩人・子どもの文化研究所長

白鳥の歌

『ぼくの戦争と紙芝居人生』（編集・発行：子どもの文化研究所 / 取り扱い：地方小出版流通センター）は、愛媛の松山市にあって、永らく小学校の教師を務めながら、紙芝居や戦争をテーマにした児童文学を通して、平和の尊さを熱く訴え続け、昨2017年4月に享年91歳で亡くなった宮野英也氏が不治の病の床から発せられた、「いま、この時代に言い残しておきたい」との固い意志によって陽の目を見ることになった、いわば、市井の人の白鳥の歌である。

宮野氏は、1925（大正14）年、伊予市に生まれ、太平洋戦争末期に愛媛師範学校本科2年160名の学徒動員の1人として、呉の海軍工廠で「空腹をかかえ、空襲におびえながらも、祖国の必勝を信じ、しかも使命感に燃えて」敗色濃い戦争を支えるための軍備の増強に全力を尽くした。

動員学徒援助会の編の「あしあと」によると、310万人余が動員され、推定犠牲者は5～6万人というが不明なことが多い。宮野氏は、この歴史の暗部を後世に伝えようと、筆を執り、『ペンを奪われた青春』（三一新書1967）や児童書シリーズ『父が語る太平洋戦争―「空と海とを血にそめて」』（童心社刊1978）の中で、疲労と睡眠不足でメッキ槽に落ちて沸騰する亜鉛に溶けてしまった学生のエピソードなどを書き残している。「平和を守るためには、戦争を正しく認識しなければならない。そのためには、「生き残った」私たちが血の代償として得た民族的な戦争体験の意味をいろいろと問い続け、明らかにして行く責務がある」…宮野氏のこの立ち位置は、その後の氏の生き方を貫いている。

ぼくの戦争と紙芝居人生
シリーズあしたへ伝えたいこと1
宮野英也／著
文民教育協会子どもの文化研究所
ISBN コード 978-4-906074-01-3
税込価格1620円

平和教育

敗戦で復学した氏は、卒業と同時に伊予市の小学校教諭として、児童文学や紙芝居を通して平和教育に打ち込む。「子どもたちに、戦争児童文学と出会わせ、親子で話し合えば、現代史を学ぶこともできる。その中で現実を見つめ、自分で考え、真実をとらえる力を養ってほしい。それが、命と人権の大切さを理解し、平和な未来を創造する力や生きる力を育てることになる」との信念からだった。

氏と紙芝居を結びつけたのは、1953（昭和28）年、高知で開かれた日教組全国教研集会で、稲庭桂子（紙芝居作家・教育紙芝居研究会事務局長）の作品『平和のちかい―原爆の子から』（佐藤忠良画・童心社）を見て、紙芝居が見る人の心をとらえる力の大きさに感動したことによる。氏は紙芝居を平和と子どもたちの幸せのための文化財とするための研究・創作・普及に取り組み、「紙芝居先生」と呼ばれるほどだった。氏の関心は、街頭紙芝居や手作り紙芝居による地域の伝承文化の活性化、福祉紙芝居、紙芝居を通しての国際交流などにも及んだ。

ベトナムとの30年

氏が初めてベトナムを訪れたのは、1994年、我が国の紙芝居関係者が作った「ベトナムの紙芝居普及を支援する会」のメンバーとして、ニャンチャン市で開催された紙芝居フェスティバルに参加したのが最初だった。それから30年に及ぶ交流が積み重ねられるが、その間、ベトナム戦争の戦地跡を訪れて、米軍の枯れ葉剤作戦の後遺症にいまなお悩む人が100万人を超えることにショックを受けたり、親交を結んだ作家を松山に招いて交流会を開いたり…、「ベトナムを見つめ現実を考えることによって、日本の戦争の歴史と戦争体験の意味をとらえ直し、戦争それ自体がはらむ、非人間性、悲惨さ、何よりも戦争が無意味な行為だということを、今ほどしっかりと伝えていかなければならない」と、非戦と平和を行動で発信し続けた。

シリーズ「あしたへ伝えたいこと」ほか

まさに「白鳥の歌」と呼ぶにふさわしいこの宮野氏の遺稿集の刊行を機に、子どもの文化研究所では、シリーズ「あしたへ伝えたいこと」を順次展開して行く予定である。人の一生は次世代に伝える価値のある貴重な生きる知恵の宝庫だ。その伝承の断絶は、文化をはじめとする人間活動を劣化させ

る。その流れを止めるためのくさびを打ちたいとの願いからである。メッセージ性を持つ自分史刊行にご期待とご支援をいただければ幸いである。

我が国唯一の子どもの文化専門誌

子どもの文化研究所は、一般財団法人文民教育協会として今年創立50周年を迎えるが、発足以来、主体的な子どもの育成を支える文化の創生を目指して、アーティスト、保育・教育実践者、研究者、親が集い、多様なコラボレーションを続けてきた。その情報発信媒体が、発足以来続いている月刊誌「子どもの文化」と、1999年創刊の年刊誌「研究・子どもの文化」である（両誌とも地方小出版扱い）。

月刊誌は、子どもの文化に関わる様々な領域の連載のほか、テーマ特集を設定し、4月「保育指針と現場」、5月「ポケットに憲法を」のようにティピカルな主題を取り上げて、識者による解題、インタビュー、子育て現場からの実践報告、読者参加など、質の高い情報を読みやすくして提供している。4月号では、保育所保育指針・幼稚園教育要領の改訂が持つ政治性（ポリティックス）を、師岡章白梅大学教授が鋭く抉り出して話題となった。5月号では、「あなたが考える憲法とは？」という問いかけに、期せずして小学4年生と大学院生が、動物との共生を挙げたり、「国の在り方の根底を築く憲法に宿る精神を子どものレベルにスケールを変えて意識させることが憲法を実感させ、守っていこうという意識の芽生えに繋がる」と提言する大学生などの若い世代の自分の言葉による主張が光っていた。

研究子どもの文化　NO．19
特集：子どもにとってアニマシオンとは
「研究子どもの文化」編集委員会
2017年11月発行／税込価格1,080円

「研究・子どもの文化」19号（2017年11月発行）の特集テーマは「子どもにとってのアニマシオン」。アニマシオンとは、スペイン留学から帰国した社会教育・福祉学者の増山均元早稲田大学教授が1990年代に提唱した理念で、人間の魂を活性化する営みを指す。そのアニマシオンを、今なぜ、特集テーマとして取り上げるのか？　本誌の中で、増山氏は、全国各地の伝統的な「祭り」について、「そこに参加した個人を元気づけ、住民を統合し、地域社会を活性化させる〝祭り〟の役割は、まさに〈社会文化アニマシオン〉そのものであり、そこに貫かれたアニマシオンの機能によって子ども・若者を育て、地域住民の結びつきを強め、地域社会の維持・発展をもたらす。少子化・高齢化によって、地域社会そのものが衰弱しつつあるとき、また住民相互の結びつきが希薄化している今日、「祭り」が持つ〈アニマシオン〉機能と〈社会文化アニマシオン〉としての役割にもっと注目すべきであろう」と述べている。また、5人の筆者による、「歌・語り・遊び」（鵜野祐介立命館大学教授）、「ファンタジー遊び」（北島尚志NPOアフタフ・バーバン理事長）、「プレイパーク」（阿比留久美早稲田大学講師）、「駄菓子屋文化」（松田道雄尚絅学院大学エクステンションセンター長）、「東日本大震災後の復興における祭り」（加藤理文教大学教授）も、現代の子どもを識る上で多くの示唆に富んでいて、多くの読者の興味を引くに違いない。一読をお薦めしたい。なお、両誌のバックナンバーも用意してあるのでお問い合わせて下されば資料をお送りする。

＊

かたおかひかる / 詩人・一般財団法人文民教育協会・子どもの文化研究所所長・東京家政大学名誉教授
E-mail：info@kodomonobunnka.or.jp

新刊ダイジェスト

※価格は税込（消費税率8%）表示です。

この「新刊ダイジェスト」のバックナンバーを弊社Ｗｅｂサイトにたくさん掲載してます。
機会がございましたらぜひご覧ください。アドレスは以下の通りです。
http://neil.chips.jp/chihosho/digest/index.html
＊検索サイトで「地方・小出版流通センター」とキーワード検索してください。

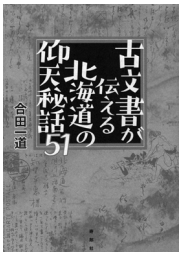
『カズオ・イシグロの長崎』●平井杏子著

2017年度のノーベル文学賞を受賞した日本生まれの英国人作家カズオ・イシグロ。彼は1954年長崎市新中川町で誕生した。長崎海洋気象台に勤務しながら海洋学を研究していた父・鎮雄が英国国立海洋研究所に招聘されたのに伴い、一家で英国に移住したのが1960年。イシグロが長崎で暮らしていたのは5歳半までであり、記憶はコマ切れで時にはぼんやりとしていたが、逆にそうだからこそ記憶の曖昧さや歪みといったものが人間にもたらす功罪という文学のテーマと出会うことが出来た。そんなイシグロの素顔に同じ長崎出身の著者が長崎という町を軸にして迫っていく。

祖父や両親のゆかりの地や当時通っていた幼稚園、イギリスでの足跡など貴重な写真も満載。さらに長編第一作「遠い山なみの光」から第七作目「忘れられた巨人」まで小説に描かれた長崎と日本にもスポットを当てる。イシグロの文学の原点を探る旅にいざなわれる気分にさせてくれる。

◆ 1,944円・A５判・140頁・**長崎文献社**・長崎・2018/3刊・ISBN9784888512916

『古文書が伝える北海道の仰天秘話５１』●合田一道著



300年に及ぶ蠣崎（松前）家の蝦夷地領有を決めた徳川家康の黒印状を始め、北海道博物館、北海道開拓記念館、北海道立文書館、北海道大学附属図書館、函館市中央図書館、国立公文書館、天理大学附属図書館ほかに収蔵される古文書を読み解き、あまり知られることのなかった歴史の一コマに光を当てる。家康の黒印状には、蝦夷人（アイヌ民族）に対して道理に外れたことをする者は厳罰に処すことも記されていた。文書は戦後、松前家から古書店に売られたが、後に北海道が買い取ったのだという。その北海道の命名に寄与した松浦武四郎の建白書には、アイヌ民族の住む大地にふさわしい地名にとの思いが込められている。五寸釘寅吉こと西川寅吉は強盗犯にして脱獄魔。最後に網走監獄を出獄した時は70歳になっていた。それからは心を入れ替え、劇団を立ち上げて、世の人のためと全国を巡業した。北海道の長い歴史の裏面史。いずれも確かな文書に裏付けされて興味深い。

◆1,944円・Ａ５判・184頁・**寿郎社**・北海道・2018/4刊・ISBN9784909281081

『秋田県の力士像　力士さん見て歩き』●渡辺　修著

表紙では、大きな文字のサブタイトルを７つのいかめしい顔の木彫り力士画像が囲んでいる。タイトルの文字はなせか小さい。　本文では、秋田県内63か所の主に神社拝殿で見られる木彫り力士像についての記事が簡潔にまとめられている。63か所は全国一の数で、地域別では県南・横手市近辺に多く、県北ではほとんど見られない。作られた時代別では幕末から明治期が多く、大正期から戦前はごくわずか、戦後には作られなくなった。仁王像のように目立つ存在ではなく、「屋根に潜む脇役」という感じの力士像だが、集結すると掲げられた場所の違いや表情の豊さがはっきりし、力士像というジャンルの存在を知ることができる。　本文中、美郷町六郷の湯田三吉神社は、元々は昭和50年に廃村となった湯田という山里にあった。湯田廃村を訪れたことがある評者は、拝殿に構える力士さんを見て、「真ん丸目玉は明治維新の頃から百年以上、時代の移り変わりを見てきたのか」と思った。

◆1,620円・四六判・219頁・**秋田文化出版**・秋田・2018/3刊・ISBN9784870225817

『御願の道具と供えもの事典』●稲福政斉著

ソーグヮチ（正月）には、アカカビという赤黄白三色の紙を重ね敷いた上に、クニブチ（みかん）、ウチャヌク（餅）、ハナグミ（米）タントゥクブ（炭に昆布を巻いたもの）、貨幣などをのせ、仏壇やヒヌカン（火の神）、床の間に飾る…著者はこのような、沖縄の年中行事、法事等の祭祀儀礼における手順、供物や道具の整え方といった「もの」「形式」を詳述した書物の少ないことを痛感し、本書を思い立ったという。面白いのは、所々にちりばめられた「冗説閑話」というコラムだ。例えば、古来より中国では書を、日本では刀を、沖縄では三線を床の間に飾るのが慣わしであるという説に対して、そもそも床の間は日本で生まれたもので中国建築にはない、沖縄では最近まで床の間のある民家は少なく三線も高価で裕福な家庭しか持てなかった、よってこれは芸能と平和の島と言う沖縄のイメージを強調するが故の俗説である、そうばっさりと切って見せるのである。その眼と判断力は、流布された情報に惑わされない本物の研究者のもので、痛快ささえ感じられる。

◆2,376円・215mm×168mm判・127頁・**ボーダーインク**・沖縄・2018/1刊・ISBN9784899823308

『ここまでわかった甲賀忍者』●畑中英二著

忍者といえば様々な物語の中で鮮やかな活躍をしますが、それはなかなか荒唐無稽なもので、現実の忍者がどういった存在かはあまり知られていないように思います。

本書では滋賀県南部甲賀の地を故郷とする甲賀忍者の姿がコンパクトにまとめられています。甲賀は戦国時代には守護大名の支配を受けず独立性の高い地域でした。彼らはゲリラ戦を得意とし、甲賀のためなら裏切りも厭わないために、名だたる大名も扱いに手を焼きました。忍者といえば忍術というのも注目のポイントですが、これは砲術や薬学など高度な科学的知識に裏打ちされたもの。彼らはこうした武器をもって傭兵のように活躍しました。地縁による結束と特殊技能により、甲賀衆は忍者として一目置かれる存在となったことがわかります。甲賀の地には今も史跡が点在し、現地に赴けば忍者の里の雰囲気も味わうことができます。本書を参考書にして、甲賀流忍者検定を受けてみるのもいいかもしれませんね。

◆972円・Ａ５判・63頁・**サンライズ出版**・滋賀・2018/3刊・ISBN9784883256389

売行良好書　期間：2018年4月15日～5月14日

［出荷センター扱い］ ※価格は税込（消費税率8%）表示です。

(1)『ひとり　句集』2160円・深夜叢書社　(2)『猫はしっぽでしゃべる』1512円・ナナロク社　(3)『やまがた百名山』1944円・みちのく書房　(4)『東京の森のカフェ』1404円・書肆侃侃房　(5)『かくれキリシタンの起源』4320円・弦書房　(6)『大谷翔平　挑戦』1404円・岩手日報社　(7)『松浦武四郎入門』1080円・月兎舎　(8)『西南戦争　民衆の記』2376円・弦書房　(9)『ここまでわかった甲賀忍者』972円・サンライズ出版　(10)『カズオ・イシグロの長崎』1944円・長崎文献社　(11)『殺人者の記憶法』2376円・クオン　(12)『近現代アイヌ文学史論』3132円・寿郎社　(13)『田の神石像・全記録』4104円・南方新社

［三省堂書店神保町本店　センター扱い図書］ ※価格は税込（消費税率8%）表示です。

(1)『本の雑誌　４２０号』720円・本の雑誌社　(2)『本屋大賞　２０１８』700円・本の雑誌社　(3)『東京かわら版　５月号』500円・東京かわら版　(4)『昭和プロレスマガジン　４５』1000円・昭和プロレス研究室　(5)『絶景本棚』2484円・本の雑誌社　(6)『殺人者の記憶法』2376円・クオン　(7)『奥多摩登山詳細図（西編）』950円・吉備人出版　(8)『来た見た食うたヤマサキ兄妹的大台南見聞録』1728円・書肆侃侃房　(9)『短歌タイムカプセル』1620円・書肆侃侃房　(10)『奥武蔵登山詳細図全１３０コース』950円・吉備人出版

［ジュンク堂書店池袋店　地方出版社の本―センター扱い図書］ ※価格は税込（消費税率8%）表示です。

(1)『東京の森のカフェ』1404円・書肆侃侃房　(2)『花は泡、そこにいたって会いたいよ』1836円・書肆侃侃房　(3)『帰る家もなく』1944円・ボーダーインク　(4)『やまがた百名山』1944円・みちのく書房　(5)『飛騨中世城郭図画集』5400円・桂書房　(6)『かくれキリシタンの起源』4320円・弦書房　(7)『橋が教えてくれたもの』1728円・共同文化社　(8)『夢の久作のごとある』1080円・不知火書房　(9)『埼玉の城』2700円・まつやま書房　(10)『松浦武四郎入門』1080円・月兎舎　(11)『琉球菓子』2376円・沖縄タイムス社　(12)『奥武蔵登山詳細図』950円・吉備人出版

以下ホームページ等でも各種情報提供を行なっております。ご利用ください。
ＵＲＬ：http://neil.chips.jp/chihosho/　　ツイッター公式アカウント：@local_small

トピックス ―― ★★★

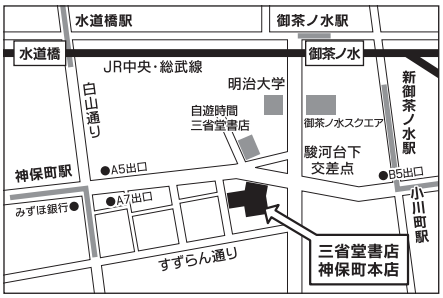
▼７０年代初頭だったと思いますが、日本の書店で初めて「地球半分の重さ－女性その軌跡」という女性関連書ブックフェアを企画し、それ以降、三省堂書店の重鎮として支店の拡大や管理等に尽くし、引退後の昨年は、北海道の「留萌ブックセンター」の経験を基に、書店のなくなった那須町で「那須ブックセンター」を開店させた、森雅夫（元三省堂書店専務）さんが享年70歳で4月25日に亡くなりました。毎年お盆休みの「ふるさとの本フェア」や、閉店した「書肆アクセス」に代わる三省堂書店本店４階「地方出版コーナー」設置も提案していただきました。ご冥福をお祈りいたします。

▼1975年に全線開通した「三江線」は48年の歴史を閉じましたが、同じ島根県から広島県に走る1916年（大正５年）開通の木次線は、1980年代に人口減少を理由に廃線対象となったものの、「沿線道路が未整備」という理由で現在も存続しています。JR西日本は、1998年に、臨時の観光トロッコ列車「奥出雲おろち号」の運行を始め、危機感を感じた沿線住民の協力もあり、鉄道ファンなどの観光客や地域の子どもたちが乗る人気列車となっています。2018年２月に**【木次線ローカルガイド】**（本体1,200円/978-4-86456-263-8/ハーベスト出版）が出ていますが、本書は、島根大学の有志と出版編集者、沿線をよく知るデザイナーの取材と執筆でつくられました。

郵便販売のご注文方法

◎お名前、お届け先（郵便番号、住所）、連絡先お電話番号、ご注文品の書誌名、冊数の必要事項を明記のうえ、下記までＦＡＸでご連絡ください。
◎送料は、冊子小包・メール便共実費でお送りさせて頂きます。
◎なお書籍お買上総計（税抜き価格）が5,000円以上の場合は、送料をサービスさせて頂きます。

★地方・小出版流通センター
ＦＡＸ：０３－３２３５－６１８２

地方・小出版物のデータになります。綴じて保存してください。

三省堂書店 BOOKS SANSEIDO
営業のごあんない
神保町本店 ４階
地方出版・小出版物フロア
営業時間 10：00 AM～8：00 PM
〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1-1
TEL. 03-3233-3312(代)
URL. http://www.books-sanseido.co.jp
本店4階売場では、地方・小出版流通センター扱いの新刊全点のほか、地域別に書籍を取り揃えております。また、地域ならではのタウン誌、趣味の雑誌も扱っております。